癸酉引附

文化癸酉の
夷比白らせ

歯固や老はかなしき鏡餅　月邨

手の形や大和言葉も花多川

撞の音に〜大内ほの松の風　沾花

ふむ土のうしろめし〜麦日新

ゐ〜雲のゆり白く手の梢う影

松よりをとたぬ面なしけさの夷　佳洲

文化10年(1813)

一日く雲如なる物くふ
くれて行く手ハ臭もなし　為もなし

蓮葉や見てなき数の積ため　沾徐
さく梅の蕾てさてぬかほるる
同じ日にこそもまハしふる

蓮葉に見せぬ米の砂可形　沾蛟
咲うめハ梅うるむ枝ぬる
宮川の堀や鶏ふる恵

信濃ちりき的石町に
人麻呂社ハ
月のくと的石をとらるるえ事ふ　会留
林ハかんうるひた谷を出る時
掛乞と天の岩戸の明ふ

七夕恋の数めたる人の乳　秀挙
後日も思ふ事の日数ふ
後ふ行ふハ歓ふ事ふ

巣の旦諸士の初霜
鄙さく〜くめてたさよ
老夫もこころいさめる

武士の袖白たかなりと敷の炎　沾圃

岩菓や格子の枝の曳き詠
豆う川や又こゝいとり引出す

佛友

ちりうのわらをもと唱てゑ
氷面境月のかゝとゝ竹ゝ
とゝの尾よ近出ゝ書赤鯛

扇計

朝日ハ光よりも汚れとゝ川日ゝ
月う川る水よ卵ゝする梅可能

うゝ人も梅も寒ゝ川日数ゑ
未廣う庵ゝ月ゝ日のゝめ　琴仙
気のほかぬ日の伸尽る梅ゑ
茸を変化せゝ月ゝ〜ゝ手のくれ
なゝかゝさゝ
ゝゝかゝのゝゝさゝ
七夕書変我身ゝ布衣のさゝめ　其伯
小松ゝく秋よゝくゝゑ胡蝶ゑ
手の枝の床よ勝気や福寿草
一ゝゝもの美ハさゝたり明ゝ炎　沾洲
蛍書蘇ゝ明ゝハ志ゝ氏

手の枝を星の林よ往来る
鶯うたひ〳〵て夜と明けぬ　九雪
水とりて魚の味ふ夜日哉
身やられ人くれ日くれ蓮も著
うゝゝなゝゝふるのきて
太手の蓮脱てくれや蓮脱　紫泥
聖とけて青きを〳〵やゝ冷
り手やこしぬき草の庭に捨
隔なくはゝなるいや松かう
おれてもらしゝちとくれても柳哉　無窮

夜を知心いふをゝゝりくれ
さゝ使ふ岩戸もかやを刈晨出　祐之
おりくれくれうかくれうり柳は目
ゝゝ玉の夜をいろをんを手の波
松もゝ柳も柳ゝ我子代の夜　米仙
竹垣の四辺めゝ新しうめの沿
ゝるくゝしの使ひに
柳をえて手莊おこをと上洛丹
ふ赤の餅や立ゝの目の仕め　素泉
柳ゝ世界の夜花小庭哉
日ゝ川ゝたほゝゝ立ゝふ西遠哉

元日や今日一日の命 こがらす　沾洲

雪もまだ梅もれぬこゝの音うら

手の笑ひ川をうる煙をうれ

手ぶくわ　ことぶくことぶく　旦　佛也

横ぶと思へとやちるうめの花

たく薪やこゝ三日の日わすれぶき

さつ空やむふとこゝて千万里　沾夷

斛の梅もうれぬやわら軒端

海豆の花ふむ手の笑海苔

上もぶ〜日の本よりこゝ死初日　之卿

うぐいすやいとゝ世ハ多の見

ぶも亦宝の市やぶ〜のこゝ

海山や礼義ゝ世ぶ初日出　沾保

うぐいすも一時よ来たり梅柳

ぶぶぬや代〜玉川のゝの水

浦〜や船も松ゝ川日の出　翠羽

初日や梅よ尺ぶぶく梅の宿

晴れや第ゝ戸も拝ぶ〜煙の音

田たるゝ代の恵ゝ四方の安　宗牧

たさゝ湯よ蒼こひゝゝや除松の梅
歯固や餅の霜ハいろ〳〵れ　石白烏
子咲の梅をゝんなる花地獄哉
い祝はむもしらさを積なるたしの哉　其楓
ふむ石ゝとゝこゝろ哉遠了那
ふゝゝの雪や白くさそいろう　五蘊
雪とけハ日数ハ流れしめる哉
年後を
屠蘇酒や雑煮やとゝかゝる哉　亀翁
秋〳〵便りわるゝ　岩巻略

うゝ小さや屠蘇ゝ五敷　千車
梅ゝ梅の忘なゝ世の哉
梅ゝ雪の流さくゝ遠了那
太箸や例ゝ〳〵さ三論の杉　呼名
梅探ゝさそゝの文や歌一そ
手俣の底ゝそゝ河瓦玉ゝ哉
初の字を初の屠や七草の哉　秋旭
明ゝ遠くゝこゝろゝ近〳〵地哉日
七草や茶手ゝなるゝ川ゝさ除雪風

万年やいとさしに子代乃葉　前峯

流れもとをせもり松や淀川

聖とく夜とくの一枝こ旅こて

太刀乃宮乃住きやまぶき　佐全

いさかの汚れなさ香や梅花

夜ふかて押う却くる手の木戸

聖の　ぼたん

とゆるとも誘こて　松かさり　佐魚

くるくこ夜の日影に　玉柳

かとく日中雪の底ぬく土大根

こそこ手命ゆりけるぼたん　玉山

聖ぼたん川ぼたんれかゆの雪乃

松かけにわうれ手ぼたん枝乃

松竹の形時睦むゆりつり夜　雪堂

二花夜をお堂ゆ柳

うれさの夜をかさりて前枝

こそ　ぼたん　かくる夜をいたて

又六十かちぼたん乃を日ぬきめ　蔭百

當の時やをゆ川日乃ゆる

ぼたんゆる手の波波や澄の松

初霜の常のごとくはつ旦の朋　逸翁

人呼ばれさて畑の霜哉

朱る実のくれなゐ若や手一杯

つ松ぬの眺めのもしめ哉　佐舎

青柳や水よ曲らぬ枝ぬ新

朱る実を磨く光や除夜の星

封をきるは紙よりもぬの実　器翁

蜜の香の初のまりや雪解

ときこそときくのかはもも手一杯

元日や二度の神代のこころ哉　佐佳

青柳の風かほるる庭の梅

除夜の鐘此夜の音

初夜を見こそ寝ぬ鶏の鶏　佐惠

苔も木も霜ぬる乳房や夜の雪

鶯柳や夜明の伊達の鼻

子代を乞ぬ約諾清き月日哉　佐曉

風の朱て糸遊ぶる柳丁那

折らもて夜をたらやこの夜

ときるのを酉の初昂寒北夜　佐和

青柳よ立ちるるや花さ

餅の粉の戸板よりぬけ出る手の氣
元日や氷よりのこる太鼓の音　水　李秋

梅ハ梅と志ら〳〵闇の木立哉
七五三縄を結て手のとゞく哉
初鶯のこゑや巣ゐの引旦　芳樹

梅梅やふゝみ門より吹る風
焼餅とくもにゐるや我心　昕我

つゆ〳〵くまてい太手ゆりて朝の吹
手枕や傍子をとして梅の風
手の矢もたるゝ哉ゆしたを引る弱

七草の日に為ゝ〳〵ぬきゝ引哉　沾廉
雪とゝゆ〳〵神山や苔の岐〳〵より
手の初や吹を含めるつかさり
わさ出る潮の春ゝ日ゝ雨　沾常
鮮〳〵引ゝほゝろいたゝ梅柳
世の深の深ゝ光〳〵の淑川哉
一睡ゝ雪ハ玄手ゆりの明ゝ吹　沾交
こゝ花ゝ沼もこゝゝて寒菜哉
花ゆりてさゝや巣ゐの梅梭
目ゆ忘れハ〳〵〳〵ゆりぬ古衣　子風

雲も風も行るを絶うこす夜の空

夜造く匂りて夜の末枯の卿

樹たちこそろとなれりさの夜　先易

日の夜や土のけふりの水よ新

手洗のうるをしやの夜の岸近く

一とせのたしめやとりのうたひよ　月仲

身込と同よ鶏る度毎夜日の出

千潟蒔や蒲菖使よ夜の色

七夕夜に生合からや屠蘇一つ　沾舟

川せきき夜と画やうめ柳

手の尾の色うめ枯や焼のこれ

法徳に沿実うほよとうめ　歌鬼

歌寄て夜と探らや日のさ色

沾て見柳や手とと出ふさ

這子まて并の数歌ーさ川日新　子友

色もき香と沾り柳り歌ほけ

二千里の数も声川けー手の波

嗚呼たらしー手十かうの松り夜　花香

渚とて新くう空やかはろ月

ぬてだーな暦ハ右よ美さ先

生ける手も二株中三ツ枯　夾漸

木の根さへふり尽す夾の雪

戻されるとも花の咲も手も冥

松陰を食らるる折り門ら夾　冠李

風も夾水も夾ぬり地を度

手一杯郁の徒手も冥

夕栄もなほ初さくのころ哉　露谷

梅白れて雪解と雪の海と

手おくむ立戸牡いぬ家の雪

一とせの日も迷ひ出る郭の夾　李曉

地と二人魚つ二丈の柳哉

くれを川る手もん方日くれ冥

岩よりの烏さはりすきつ烏　弓兎

うこ出もうこくまる柳哉

日の河ふ出るむとくも参中手

人と夾を二つたへて言さ日新冥　跬歩

地の梅ろ初なくさはる春雨の風

四く手や積る日数八雲の雪

身を炎の金を起る旦那　亀山
聖人今汐走ることしとけるを
肱曲て歩を炎をあり板る哉

福を寿を瓶や土器三り哉　斗倶
凡んと処を杉田や家の梅雪　沾紫
炎をたつることさほやこうつの松
さく梅の沾り竜や金衣多
吉川炎の色を出をけり仕立の

櫛へぬく所や織やうめり沾　沾葉
仏光の盤をう川る日新可哉　沾苔
ぬり沓のとこ瓜をめけり家菜　沾鐘
小松沾く地道をなやく義多　沾汎
明る戸や凡出す新を梅の風　沾鼓
梅を香や田をうを沾雲の花雲へ　沾好
雪やけの花をかる片野戸　沾立
香をさそふ風行り日の梅日和　沾明
弱法師く地山の雲や梅おぼろ　延霞
新しを菜の色や春り雲　鬼同

吹風にさそはれ新やうめの花　瓢飲
ほのぐと梅の香ぬくし　梅月　跛鼈
俳諧よりも別し同じ夕夜の雪　胡鶴
夜の月に知らふてうぐく梅の影　玉水
暖くと雪の芽をたゞ地面の　露水
おとけなる梅よりも夜日の　素牛
息のこゝろも胡蝶も友の夜道の　唯仲
地く梅や荒されくて田のむら　狐月
雪芽や横ふも梅ふりかち　扇澤
梅梅子ら出たる女子形　負元

森てきけいぬるむ音ゆり夜り水　田舎
夜風いとれまこそ行ふ鬼の花　冠子
夜雨や旅笠の多り捨ゆ　瓦山
うぐひすや人音梅の形座　里々
月の窓俳子にうぬの星溶　平部
おぼろとまさもう梅の月枝　我彦
鶯の鳴方ハ入江り乾かす夜　春里
月の光りかさ梅くて雪解　狐来
雪り息とり水地ゆり　狐筵
色こきハ夫蕾ゆり夜の芽　雪旦

旬の梅　詩人の吉かたるか　雨丘

遊人温泉を思ひ遠流の行　鶯水

とけぬる雪や街に夾の水　鶯塵

老を積てはほんまの枝ぶり　平砂

四栖魚を放て沼の蓮　米仲

柳まで籠炊賣や宮の市　岩松

ちくはとくれぬ春とかはき　崑山

餅屋や夾へ込と立の栄　子鶯

立い枝のむらむら夾まつたり　佛外

とる虫しやおろかなる沼の蓮　木黄

水と引手や車の名くる川　宗俤

玉の緒をむすんとも思ひ　成之

月落ハ花ハ春ぬりぬまのこれ　通故

蓮まで又白めさ先んと一枝　成川

夾まれと思ハもさ込枝の　律鼓

歩行や吹ぬ風そふ磯ぢき　泊山

手ならして文化木の葉の日影哉